

sinozaki ジグメントだより

篠崎フクシ

雨季をうしなった今年

かわきをいやそうと

校庭のすみに

井戸をほることにした

ほりすめると

水のかわりに光が湧くので

いのち綱をよくしめて

底のそこをたしかめにいく

光は生あたたかい

あかんぼうの産着のようで

やわらかだ

やがて

氷柱のような

白い円錐たちが上下にひろがると

光のさきに人の眼玉のような

ものが見えた

光のふちに手をやり

おもいきり

からだを外へともち上げる

ぬるりとした感触と

あたまをおさえつけられる

不快が好奇心にかわる

大きな人が不思議そうに

〈それ〉をながめている

ふりむけば、うつろな眼をした

小さなおとこが、口をあけている

雨季をうしなった今年

かわいているせいか

校庭のすみでは

井戸から焰があがっている

だれも消すことはできない

—— 〈自我〉がこわれていますな

大きな人がペンチを握り

抜いておきましょう

などと言う

小さなおとこはしかし

最後の矜持をみせようと

〈それ〉の導火線に火をつける

雨季をうしなつた

この夏のかわきは

小さなおとこの

大きななげきでもあるらしい

校庭のすみでは

潤れ井戸をかこむ生徒たちが

〈わたし〉をこえる何者かに

いどむような眼ざしをむける